

ネコを食う

もりやま たくみ
森山 工

民博 特別客員教授・東京大学大学院教授

「野蛮」なる慣行？

アフリカ大陸南東の沖合、インド洋上に位置するマダガスカル島。一九世紀末、その中央高地の北東部でキリスト教の布教に従事していたあるイギリス人宣教師は、驚きとともに次のような報告を残している。

「この地域の人びとはネコを食べる」

愛玩動物としての家ネコを思い浮かべるなら、確かにシヨッキングか。猫食という慣行は、時代と地域により広範な分布を見せるものだが、犬食とならんでタブー視され、不可視化される傾向にある。それは猫食を「野蛮」と断ずる傾向とも重なる。宣教師の驚きにも、「野蛮」への恐れがこめられていたのであろう。だが、「野蛮」と決めつけることは妥当なのか。以下をご覧ください。

捕まえた「盗人」

「今日の昼のおかずはネコだよ」
件の宣教師がいたのと同じ地域でのことである。ある朝、よく訪問しているネコを、捕まえたのだそう。

猫食とはいえ、マダガスカルの家ネコは外来起源である。わたしの調査時でも、この地域ではネコを飼うという習慣そのものがなかった。また、食用にネコを飼育するという



直火であぶって毛を除去する

習慣もなかった。わたし自身が猫食を経験したのも、このときだけである。彼らが食べるのは、野生ネコなのである。マダガスカルで野生ネコには「盗人」のイメージがつきまわっている。人を野生ネコにたとえると、その人が徘徊しながら他人のものを掠めとっているという意味になる。だから、この家人がニワトリに手を出しているネコを捕まえたというのは、そのイメージと符合したのである。

たまさかのご馳走

ネコを殺し、毛を炙って除き、解体し、調理し、という一連の過程で、この一家（一〇代から二〇代にかけて、男女の子どもが九人いた）は終始興奮に包まれていた。ネコを食すのが、この人たちにとって非日常であったことがわかる。盗人には肝が七つある、などという言い伝えをもちだして、ネコを解体しながら内臓を数え、わたしの目にはかなり恣意的とみえる数え方で、ともかくも数が七つに一致したときの、彼ら彼女らの感きわまつたようす。

そもそもネコが常食だったわけではないのだ。野生ネコを捕まえたときの、たまさかのご馳走だったのであろう。煮込みとなって昼食に供されたその肉は、ウサギに似た味と食感で、些かの野生味を感じさせた。まことに食文化は、地域によって多様である。